

木村健二郎先生を偲んで

富 永 健（化学教室）



本学名誉教授木村健二郎先生は、去る10月12日早朝、心不全のため逝去されました。享年92歳でした。

先生は、明治29年のお生まれで、大正9年東京帝国大学理学部化学科を卒業された後、理学部副手、講師、助教授を経て、昭和8年東京帝国大学教授に昇任されました。以来、昭和31年7月に新設の日本原子力研究所理事に就任のため退官されるまで、多年にわたり本学において研究・教育に尽力されました。

先生は、分析化学、地球化学、放射化学など化学の広汎な分野にわたって数々の極めて優れた業績を残されました。とくに、希元素の分析化学・

地球化学に関しては、大正9年頃から故柴田雄次教授とともに始められた「東洋産含希元素鉱石の化学的研究」は、わが国における希元素の化学の先駆的研究であり、木村先生はこの業績に対し昭和20年帝国学士院賞を受けておられます。また人工放射性元素の放射化学の領域では、昭和13年頃から故仁科芳雄博士と協力して行なわれた理化学研究所のサイクロトロンによる研究でウランに速中性子をあてて新核種 U-237 や新しい核分裂生成物を発見されたこと、昭和29年に故南英一教授らとともにビキニ環礁における核爆発実験の「死の灰」を分析されたことは世界的に有名であります。

先生は本学在任中には昭和28年から2年間理学部部長として学内の行政面に尽力されましたが、退官後も昭和39年まで日本原子力研究所理事、昭和39年から昭和43年まで東京女子大学学長などの要職を歴任されました。政府関係の多くの委員会の活動にも寄与され、とくに放射線審議会では会長として活躍されました。また、日本化学会では昭和21年度（旧日本化学会）および昭和40年度の2回にわたり会長をつとめられましたが、このほか日本分析化学会などにおいても会長として学会の

発展に貢献されました。先生はこのような数々の優れたご業績により昭和36年日本学士院会員となられ、昭和48年には勲一等瑞宝賞を授与されました。

先生は温厚で、すべての人に対して包容力の大きな方でありました。敬虔なキリスト教徒として生涯を通じて信仰を貫かれたばかりでなく、その教えを常に実践して来られ、誠に立派なお人柄でありました。化学教室の私どものクラスは、残念ながら先生のご講義は、ご退官の最終講義しか拝聴の機会がありませんでしたが、当時の諸先輩から伝聞した木村先生、学会ではいつも前列に端然と座って居られた先生はいわば雲の上の存在でありました。近年、正月や折々にお目にかかる先生には、誰にでもこまやかな心くばりをもって接される慈父のようなあたたかさが感じられ、それだけに孫弟子である私どもにとっても先生の急逝は深い悲しみでありました。

先生はすぐれた科学者であるばかりでなく、ご趣味も豊かな方でありました。形型子の号で俳句を、葉山の号で連句を詠まれ、奥様ともどもいく

つも句集を編んでおられます。また、伝え聞くところでは、先生はお若い頃には浅草オペラ（田谷力三はなやかなりし頃）や寄席の落語によく通われたということでもあります。先生は座談やスピーチが大変お上手で、短い時間にユーモアと味わいのあるお話をさらりとしめくられることも有名ですが、これも先生の豊かなご趣味ゆえでありましょうか。先生のお誕生日の5月12日には門下生を中心に毎年祝賀会が開かれましたが、今春も先生はとてもお元気で、いつもながらのよく透り明晰なお声でスピーチをきかせて下さり、白寿までも思っておりましたのに、このように急に逝去されたのは誠に残念でなりません。

蛇足ながら、理学部教授会でお菓子を出す慣習は、実は先生が学部長のときに発案されて今日に至っているとのことでもあります。最後に、このお写真は昭和61年4月19日、化学教室125周年記念同窓会のパーティに同窓会長として出席された折の先生であります。

ここに先生の輝かしいご功績とあたたかなお人柄を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。